

田中 純著
政治の美学

権力と表象

『政治の美学』という標
題は、もちろんベンヤミン
の複製技術論の結晶の言葉
を念頭にいたったものでは
ある。ベンヤミンは「ファ
ナチズムによる「政治の審
美化」は、完全に否定的な
コンテキストのうちに位置づ
けられており、そもそも考
察の対象からはずされてし
まっている。一方、レトリ
ック的にもそれに対置する
かたちでベンヤミンが掲げ
る「芸術の政治化」にして
も、少なくともその語り
られているマルクス主義的な
コンテキストの手作業的に
受け止められることはいま
ではほぼほぼ許されておら
ないといえる。

密度の高い表象分析

「ファシズム的」なものの本質へ

山口 裕之

田中氏の著作はこ
の標題がそのような概
念の危うさをかきつけて自ら
の力として取り込んでい
る。「政治の審美化」と直
接に結びつくファシズムに
よ、あるいは日本の「右翼
テロリズム」にせよ、この
著作は、一般にきわめてネ
ガティブな表象・反応によ
って受け止められる対象

またとりわけそのように再
構成された表象そのものに
もあえて焦点を当てていく
ことになって、政治的なもの
の美的領域の關係性を描
き出してゆく。われわれは
ほごなどの場合、歴史的に
「ファシズム」、「ファシズ
ム」に結びついている対象
に対して、これをいわずに絶
対無情に指図の中に入れ
られている。これら多様な領
域を形成する主題群だけ
な、それぞれの主題系に
おいても各章(第一部から
第四部までそれぞれ三つか
四つ)の章を持つ)がきわ
めて多彩な対象の拡がり
を示していることが、これま
での田中氏の著作と比べて
も大きな特色といえるた
う。

かつて書かれた論文を集
めて再構成した著作―本
巻は、一九七〇年代の
いって書かれていた学術的報告
書や論文を求め、今度
は専門的過ぎて概略の把握
が困難なものが多かった
このたび翻訳出版された
ものである。本書の
協会員



政治の美学
権力と表象
田中 純 著
A5判・638頁・5250円
東京大学出版会
978-4-13-010109-7

「時代論、政治的なもの
と「身体」の關係を取り
上げる第部「政体論」、
きわめて政治的な特質を
のぞとも男性結社とエロ
スの身体的なものとの結
びつきを論じている第三部「結
社論」、そして、これまで
の田中氏の執筆活動にお
けるホームグラウンドの二つ
である建築を政治的コンテ
キストにおいて扱った第四
部「建築を政治的コンテ
キストにおいて扱った第四
部」に結びついている対象
のなかへと矢継ぎ早に連
れてゆかれる。とはいえ、
作にはなほ強力な収束力
が働いている。確かに、読
者は書を追うごとに、次
ら次へとまったく異なる対
象のなかへと矢継ぎ早に連
れてゆかれる。とはいえ、
対象を扱っているにもか
かわらず、この著作にはも
う一方で、まさに一つの著作
を成り立たせている何か
がある。もちろん、個別の論
考を二つの全体的テーマの
下に集結させる構想構成、
そして編集上の技術・努力
を本書にはっきりと感じ取
ることが出来る。だが、そ
の「何か」はむしろ、ほと
んど無意識の領域を貫く力
のようこの著作を支えて
いるものといえるかもしれ
ない。それは、本書の中
で少し解き明かされてく
るものともなったのだが、
(やまぐち・ひろゆき氏)
東京外国語大学准教授・ド
イツ文学・表象文化論
★田中純氏は東
京大学大学院准教授・思
想史・視覚文化論専攻。
東大大学院修士課程修
了。著書に「残像のなか
の建築」「都市表象分析
I」「アト・ヴァールブ
ルク 記憶の迷宮」「死
者たちの都市へ」「都市
の詩学」など。一九六〇
(昭和35)年生。

「硬直した構え」を解きほぐすレッスン
足立 重和

桜井厚・山田寛秋・藤井泰編
過去を忘れない
語り継ぐ経験の社会学

本書は、理不尽に襲って
くる戦争・病い・差別・社
会問題において「被害者」
「患者」「被差別者」とカ
テゴリー化された当事者が
かかされても、もてかき
を、彼らのライフストーリー
に寄り添って解きほぐし
た、優れた論文集である。
ここでいう「もてかき」
は、日系人強制収容所、被
爆、薬害日イ、ハンセン
病、末期がん、ユニークワ
エイズ、不登校、民族部
落差別を経験した語り手
が、過去の苦悶の日々を語
ろうとするものの、聞き手
(受け手)との圧倒的な落
差のえに思わぬ語ること
をためらってしまったり、
語り継ぐことの困難から
もめるのだ。しかしそれ
も人は語らずに聴かずにい
られない。そんなギリギリ
のなかで、著者たちは「世
代継承性」という概念を提
示しながら当事者として
あるいは、当事者と調査者
のあいだで紡ぎだされる
「ライフ」を丹念に聴き取
っている。

本書は、理不尽に襲って 獄の痛みの除去を最優先
くる戦争・病い・差別・社 会問題において「被害者」
「患者」「被差別者」とカ 関係を垣間見ることができ
テゴリー化された当事者が てる。この中で、血友病
かかされても、もてかき を生きていることだったので
を、彼らのライフストーリー あり、マスメディアを通じ
に寄り添って解きほぐし て流連する「加害者」被害者
た、優れた論文集である。 者「図式をともなう」薬害日
ここでいう「もてかき」 承
は、日系人強制収容所、被 端



いって書かれていた学術的報告
書や論文を求め、今度
は専門的過ぎて概略の把握
が困難なものが多かった
このたび翻訳出版された
ものである。本書の
協会員